



132304



日文 701739306

津宮久孝

美善集注



卷之六

中央公論社

萬葉集注釋第十八卷 奥附

昭和四十二年七月十五月初版 昭和四十九年九月二十日七版

著者澤瀉久孝^{おもだかひさたか}

發行者高梨茂

印刷者山田博

印刷所株式會社三陽社東京都板橋區

板橋四丁目四七番七号

發行所中央公論社東京都中央區京橋二丁目一番地

振替東

京三四番

定價二千八百圓

本文抄造

三菱製紙株式會社

表紙麻布

望月株式會社

製本所

小泉製本株式會社

製函所

加藤製函印刷株式會社

傳不刊上義國長安年

白玉年卅美成夜良波安秋女具作波字
多知波字字安信母奴久我祚

[illegible]

和使母故家子二出字久作东和良无多来字

凡例

一、原本の傳はらない古典の注釋の底本としては、その原本の時代に近い古寫本か、世に最も廣く行はれてゐる流布本か、いづれかが用ゐられがちであるが、兩者に一長一短のある事、他の古典の場合にも既に述べられてゐるところである。

私はその兩者の長を採らうとして底本の二本立といふ事を思ひつゐた。定本萬葉集以來、西本願寺本を底本とする事が二三の注釋書にも行はれてゐるが、それは廿卷完備した最も古い寫本としてうなづかれる態度ながら、西本願寺本と流布本とは大體系統を同じくするものであるから、私は系統を異にする古寫本と流布本（寛永本）とを照合して、兩者の間に異同がある場合はその正しいと認めた方を採つた。従つてそのいづれか一本が誤と明瞭に認められるものは一々注を加へない。その底本とした二本以外の諸本、諸注によつて訂正したものののみ注を加へた。たとへば部（類）とあるは元曆本に「へ」とあるが、類聚古集に「部」とあるによつた事を示し、奈礼（代）とあるは諸本に脱したのを代匠記によつて加へた事を示し、敷（略支）とあるは諸本に「支」とあるが、略解に「敷」の誤とした事に従つた事を示し、波（古）とあるは元や寛に「婆」とあるが、古葉略類聚鈔などに「波」とあるによつた事を示した。

一、流布本と系統を異にする古寫本は殆ど廿卷完備したものでなく、中には斷簡に過ぎないものもあるから、歌一首一首に

ついでどの古寫本を底本としたかを注記した。それによつてその歌の古寫本がどのあたりまで溯り得るかを明らかにし、訓詁の參考にすると共に、古寫本の新たな發見に備へる事も出來ようと考へたからである。たとへば原文の下に（類、六・六）とある歌は、桂、金、天、元等の古寫本は傳はつてゐない事を示すものである。それら古寫本の時代については正確には定め難いが、本書に底本とするに當つては次の如き順によつた。

桂、金、藍、天、元、金砂子切、類、古、紀、尼、嘉。

一、古寫本の校合は複製本のあるものはすべてそれによつた。複製本に漏れたものは原本によつた。その場合はその所在を明らかにした。陽明本と京大本とは著者みづから原本について校合を加へた透寫本（著者所藏）を用ゐた。冷泉本、金澤文庫本、細井本、大矢本は校本萬葉集の注記に従つた。

一、原文の文字は大體舊字體（常用漢字體に非ずといふ意味）を用ゐたが、誤字考察のたよりを考へて、原文又は原本に近き書體と認められるものはそれによつた。「尔」（*sono*）、「柝」（*tsuki*）、「礼」（*rei*）、「弥」（*yoi*）の如きである。

一、原文の下に注記（類、二・九六）は類聚古集第二卷九十六頁の意であり、（古、一・一六オ）とあるは古葉略類聚鈔第一册十六丁表の意である。古葉略類聚鈔の現存の卷は八、九、十、十二と、卷名不明の卷との五册であるが、本書では複製本にかりに一、二、三、四、五と名づけられてゐるのに従つた。

一、「西（右に青）、京（青）、細などヌカシ」とあるは、シの文字が青で書かれてゐる意である。

一、本文に引用の萬葉集の歌には番號を記した。（十二三三）とあるは卷十二にある三二四番の歌である。卷數をあげないものはその注釋の卷の中の歌である。

一、萬葉集以外の歌集その他諸書の下に數字はすべて卷數を示す。日本書紀は卷數によらず單に神代紀上、神武紀などと

記した。古事記も中巻、下巻など書かず、神武記、仁德記などと記した。伊勢物語は池田龜鑑氏の校本にも採用せられてゐる天福本の段數をあげた。新撰字鏡は天治本によつた。享和本、群書類従本によるものは(享)(群)と注した。「倭名抄」と書いたものは倭名類聚抄十卷本であり、「和名抄」と書いたものは同、廿卷本である事を示した。高山寺本は(高)と注した。類聚名義抄は(佛、上)(法、中)など注したものは觀智院本である。色葉字類抄(上)(中)など記したものは三卷本(古典保存會刊)であり、伊呂波字類抄(一)(二)など記したものは十卷本(日本古典全集所收)である。一、書名を省略して引用したものを左に掲げる。

桂	桂本萬葉集	壬	傳王生隆祐筆本萬葉集
金	金澤本萬葉集	嘉	嘉曆(傳承)本萬葉集
藍	藍紙本萬葉集	紀	紀州本(校本に神田本とあるもの)萬葉集
天	天治本萬葉集	西	西本願寺本萬葉集
檢天治	伴信友寫檢天治本萬葉集(京都大學所藏)	細	細井本萬葉集
元	元曆(校)本萬葉集	陽	陽明文庫本萬葉集(京都大學所藏。校本に溫故堂本とある親本)
類	類聚古集	矢	大矢本萬葉集
古	古葉略類聚鈔	京	京大本萬葉集(校本に京都帝國大學本とあるもの。曼珠院舊藏)
尼	尼崎本萬葉集	冷	冷泉本萬葉集
文	金澤文庫本萬葉集	無	無點本萬葉集

附	附訓本萬葉集	
寬	寬永本萬葉集	
仙	萬葉集注釋 (仙覺抄ともいふ)	仙 覺
拾	萬葉拾穗抄	北村 季吟
管見	萬葉集管見	下河邊長流
代	萬葉代匠記 (引用にあたり平かなを用ゐたものは初稿本、片カナを用ゐたものは精撰本)	契 沖
童	萬葉集童蒙抄	荷田 信名
考	萬葉考	賀茂 眞淵
槻	萬葉考槻乃落葉	荒木田久老
玉	萬葉集玉の小琴	本居 宣長
略	萬葉集略解	加藤 千蔭
檜	萬葉集檜婦手	橘 守部
攷	萬葉集攷證	岸本由豆流
古義	萬葉集古義	鹿持 雅澄
註疏	萬葉集註疏	近藤 芳樹

動植正名	萬葉古今動植正名	山本 章夫
美	萬葉集美夫君志	木村 正辭
文字辨證	萬葉集文字辨證	木村 正辭
字音辨證	萬葉集字音辨證	木村 正辭
訓義辨證	萬葉集訓義辨證	木村 正辭
新考	萬葉集新考 (安藤野雁と井上通泰と兩氏に同名の著書があるので、井上氏新考と記したところがあるが、安藤氏のものは引用するところが少く、單に新考とあるは井上氏のものである。それも歌文珍書保存會刊行のものと國民圖書株式會社刊行のものとなり、主として前者によつたが、「増訂」と記したところは後者によつたものである。)	
増、選	増訂本萬葉集選釋	佐佐木信綱
口譯	口譯萬葉集	折口 信夫
總索引	萬葉集總索引	正宗 敦夫
新講	萬葉集新講	次田 潤
新訓	新訓萬葉集	佐佐木信綱
講義	萬葉集講義	山田 孝雄

新解	萬葉集新解	武田 祐吉
新釋	萬葉集新釋	澤瀉 久孝
	(伊藤左千夫氏に同じ名の著がある。その場合は著者の名をあげた。)	
私解	萬葉集私解	花田比露思
全釋	萬葉集全釋	鴻集 盛廣
古蹟研究	北陸萬葉集古蹟研究	鴻集 盛廣
難語難訓攷	萬葉難語難訓攷	生田 耕一
秀歌	萬葉秀歌	齋藤 茂吉
評釋篇	柿本人麿評釋篇	齋藤 茂吉
雜纂篇	柿本人麿雜纂篇	齋藤 茂吉
新見	萬葉集新見	森本 治吉
講話	萬葉集講話	澤瀉 久孝
小徑	萬葉集小徑	土屋 文明
古徑	萬葉古徑	澤瀉 久孝
作品と時代	萬葉の作品と時代	澤瀉 久孝
新校	新校萬葉集	澤瀉 久孝 佐伯 梅友
定本	定本萬葉集	佐佐木 信綱 武田 祐吉

論究	萬葉集論究 第一輯	松岡 靜雄
染草考	日本上代染草考	上村 六郎
植物新考	萬葉植物新考	松田 修
動物考	萬葉動物考	東 光治
續動物考	續萬葉動物考	東 光治
兵庫篇	萬葉地 兵庫篇 理研究	坂口 保 増田 徳二
大和志考	萬葉大和志考	奥野 健治
山代志考	萬葉山代志考	奥野 健治
全譯	全譯萬葉集	武田 祐吉
全註釋	萬葉集全註釋	武田 祐吉

(改造社版と角川版とがある。本書は主として前者によつたが、増訂されたところは後者によつた。現代かなづかひになつてゐるものは後者よりのものである。)

評釋	萬葉集評釋	
	(橋田東聲氏、金子元臣氏、窪田空穂氏の同名の書がある。本書には著者の名を附して引用した。)	
評釋	評釋萬葉集	佐佐木 信綱
	(これも著者の名を附した。)	

大成 萬葉集大成

平凡社版

歌人の誕生 萬葉歌人の誕生 澤瀉 久孝

私注 萬葉集私注

土屋 文明

古典大系本 古典文學大系本萬葉集 高木市之助 五味智英 大野 晋

一、本書へ引用の雜誌名で、同名が他にもありなどして疑問をもたれるかと思はれるものの發行所を左にあげておく。

國文學 關西大學國文學會

女子大國文 京都女子大學國文學會

山邊道 天理大學國文學研究室

一、引用の諸書の文章は文字もみだりに變更しなかつた。但、假名に一切濁點を用ゐないものは、馴れない讀者の不便を考へて濁點を加へた。仙覺抄、代匠記などの注の如きである。

一、現代諸家の論攷の題目には「」を加へ、單行本には『』を加へて區別した。

一、上代特殊假名遣については本書中それぞれの場合に當つて述べたが、初學の方の爲に、萬葉ではア行のエ(衣)とヤ行のエ(延)との區別の他に次の十二音の區別があつた事を列舉しておく。

(甲類) 伎、^キ祁、^ク古、^コ蘇、^ソ刀、^ト努、^ノ比、^ヒ敝、^ヘ美、^ミ賣、^メ用、^ヨ路

(乙類) 紀、氣、許、曾、止、乃、非、閑、未、米、余、呂

萬葉集注釋卷第十八

萬葉集卷第十八

天平二十年春三月二十三日左大臣橘卿使田邊史福麿饗越中守大伴家持館

時新作并誦古詠各述心緒歌四首 (BOOK 18-1) 九

于時期之明日將遊覽布勢水海仍述懷各作歌八首 (BOOK 18-2) 一二

二十五日大伴宿祢家持往布勢水海道中馬上口號二首 (BOOK 18-3) 二〇

至水海遊覽時各述懷作歌六首 (BOOK 18-4) 二二

掾久米朝臣廣繩館宴饗田邊史福麿歌四首 (BOOK 18-5) 二八

太上皇御在於難波宮時歌七首

左大臣橘宿祢歌一首 (BOOK 18-6) 三五

御製和歌一首 (BOOK 18-7) 三五

御製歌一首 (BOOK 18-8) 三六

河內女王奏歌一首 (BOOK 18-9) 三七

粟田女王奏歌一首 (BOOK 18-10) 三八

- 御船以綱手泝江遊宴時史福磨傳誦歌二首 (BOOK, BOOK) 三九
- 後追和橘大伴家持歌二首 (BOOK, BOOK) 四二
- 山上臣射水郡驛館之屋柱題著歌一首 (BOOK) 四三
- 四月一日掾久米朝臣廣繩館宴歌四首 (BOOK—BOOK) 四五
- 先國師從館欲入京設飲饌饗宴時主人大伴家持詠庭中牛麥花歌一首 (BOOK) 四八
- 大伴家持重作歌二首 (BOOK, BOOK) 四九
- 三月十五日越前國掾大伴池主來贈歌三首 (BOOK—BOOK) 五二
- 十六日越中守大伴家持報贈歌四首 (BOOK—BOOK) 五七
- 姑大伴氏坂上郎女來贈越中守大伴家持歌二首 (BOOK, BOOK) 六〇
- 大伴家持報歌二首 (BOOK, BOOK) 六六
- 又別所心歌一首 (BOOK) 七〇
- 天平感寶元年五月五日饗東大寺占墾地使僧平榮時守大伴家持送酒歌一首 (BOOK) 七二
- 同九日諸僚會少目秦伊美吉石竹館飲宴時造百合花纒捧贈賓客各賦此
- 纒歌三首 (BOOK—BOOK) 七五
- 十日大伴家持獨居幄裏遙聞霍公鳥喧作歌一首并短歌 (BOOK—BOOK) 七八

行英遠浦之日作歌一首 (B094)	八五
賀陸奥國出金詔書歌一首并短歌 (B095—B097)	八六
幸行芳野離宮時儲作歌一首并短歌 (B098—B100)	一〇四
十四日大伴家持爲贈京家願眞珠歌一首并短歌 (B101—B103)	一〇八
十五日大伴家持教喻史生尾張少咋歌一首并短歌 (B104—B106)	一一五
十七日大伴家持先妻不待夫君使自來時歌一首 (B107)	一二七
二十三日 伴家持橘歌一首并短歌 (B111、B112)	一二八
二十六日大伴家持詠庭中花作歌一首并短歌 (B113—B115)	一三四
掾久米朝臣廣繩天平二十年附朝集使入京天平感寶元年閏五月二十七日還	
本任時守大伴家持作歌一首并短歌 (B116—B117)	一三八
霍公鳥歌一首 (B118)	一四六
二十八日大伴家持爲向京見貴人及相美人飲宴日述懷儲作歌二首 (B119、B120)	一四六
六月朔日晚頭守大伴家持忽見雨雲氣作歌一首短歌一絕 (B121、B122)	一四九
四日大伴家持賀雨落歌一首 (B123)	一五三
七月七日大伴家持歌一首并短歌 (B124—B125)	一五四

越前國大塚大伴池主來贈戲歌四首 (四二六—四三三)	一六〇
更來贈歌二首 (四三三、四三四)	一六八
天平勝寶元年十二月大伴家持詠雪月梅花歌一首 (四三四)	一七四
少目秦伊美吉石竹館宴守大伴家持作歌一首 (四三五)	一七五
同二年正月二日於國廳給饗諸郡司時大伴家持作歌一首 (四三六)	一七六
五日判官久米朝臣廣繩館宴時大伴家持作歌一首 (四三七)	一七七
二月十一日守大伴家持忽起風雨不得辭去作歌一首 (四三八)	一七八

口繪

藍紙本萬葉集

寫真目次

阿遠の浦	八五
黃金山神社	九三
圖版目次	
今庄附近	三一
礪波關址附近	七三

この巻は巻第十七に引續き、天平廿年春三月から天平勝寶二年二月まで、であるが、そのうち廿年四月から廿一年三月まではかけてをり、一年四ヶ月の間の作を収めてゐるだけである。

歌數は長歌十首、短歌九十七首、合せて百七首であり、中、家持の作六十九首に及んでゐる。

この巻の用字法は第十七のものと殆ど同じであるが、この巻には他の巻に見えない用字、事、川、根、野、などと、元曆本にはゝのやうな草體の字がある。そしてそれらの用字が卷十八の五箇所に集中してゐる事を大野晋氏は「萬葉集卷第十八の本文に就いて」(國語と國文學 第廿二卷第三號、昭和廿年三月、四月)で述べ、その五箇所の特色を次の如く表示されてゐる。「また、古典大系萬葉集四の校注の覚え書でも、ある時期に萬葉集卷十八は數個所の損傷をうけた。幾首かは全く讀めなくなつてゐた。幾首かは補修して讀めるようになつた。ある部分は、讀めない部分を補うことができず空白のまま残すより仕方なかつた。